

# 2020年度 入学試験問題

## 午後入試

# 国語

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は□～□までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古くからある謎の一つに、「なぜ生物には車輪がないのか」というものがある。これに対する答えとしては、「車輪はデコボコ道が苦手だから」というのが一般的である。

車輪をもつ自動車は、舗装された平らな道の上ならスムーズに走れる。しかし、砂利道では車体がガタガタして安定しないので、スピードを落とさなければならない。大きな岩でもあれば、それ以上先へ進むことができない。確かに車輪は、デコボコ道が苦手なようだ。ましてや、① ヒト以外の多くの生物が住んでいる自然界には、そもそも道すらない。地面はいたるところ、デコボコだらけだ。これでは車輪は使い物にならないので、車輪は生物で進化しなかったのだ。これが、よく聞く答えである。でも、② 本当にそうだろうか。

私たちの周りでは、自動車も電車も車輪で動いている。どうして、私たちヒトは、車輪をよく使うのだろう。

それは、③ 車輪のエネルギー効率が良いからである。たとえば、歩行と自転車を比べてみよう。両方ともエネルギー源は人力だ。しかし同じ距離を移動するなら、自転車の方が少ないエネルギーで済むこと、つまり楽なことは明らかだ。

私たちが歩くときには、右足を前に出し、それから右足を地面に着けて止める。その間に左足を動かすのだが、それが終わると、地面に着けていた右足をまた前に出す。その繰り返しだ。つまり、右足にせよ左足にせよ、動かしたり止めたりしなければならないので、その度に加速や減速のためのエネルギーを余分に使うことになる。一方、自転車の車輪は、一定の速さで回り続ける。足のように加速と減速を繰り返さないで、エネルギー効率が良いのである。

私たちは、この車輪の利点を使うために、④ 車輪の欠点を修正する。つまり、デコボコ道を平らにする。道路を作ったり、線路を敷いたりするのである。A、デコボコを平らにするのにもエネルギーは必要だ。しかし、いったん平らにしてしまえば、その後は車輪が使えるので、エネルギーが節約できる。長い目で見れば得をするので、がんばって平らにするわけだ。

つまり、もしも地面が平らだったら車輪は進化したのだが、実際の地面はデコボコなので、生物で車輪は進化しなかった、というのが一般的な説ということになる。この説が正しいかどうかを考えるために、車輪はどのくらい地面がデコボコだと進めないのか検討してみよう。

車輪は、どのくらいの段差まで上れるのだろうか。車椅子や自動車の場合は、段差が車輪の直径の4分の1ぐらいまでなら、何とか上ることができるようだ。車輪だけが単独で転がっていく場合なら、原理的には車輪の直径の半分、つまり半径より低い段差なら上ることが可能である。これなら、車輪がそこそこ大きければ、道路がなくても走れるところが、地球上に結構ありそうだ。たとえば、タイヤの直径が70〜80センチメートルのジープなどで、道のないサバンナや砂漠を走ることは可能だし、火星の探査車もタイヤを使って、道のない火星の表面を調査している（ちなみに、タイヤというのは車輪の外側の部分で、ゴムでできていることが多い）。たしかに車輪で走れないところも多いだろうが、地球上のあらゆる場所で車輪がまったく使えない、ということはないはずだ。そう考えると、一部の地域で、車輪を持つ生物が進化したって、よさそうなものである。⑤ コアラのように注食性が限られていて、一部の地域にしか住んでいない生物はたくさんいるのだ。それなのに、どうしてサバンナにだけ住んでいる車輪をもったシカは、進化しなかったのだろうか。

しかも、車輪を複数使えば、半径よりずっと高い段差を上ることだってできるのだ。たとえば前後に車輪を付けた車の上に、重りをつけた柱を立てておく。柱は自由に曲げることが出来るものとする。⑥この車で段差を上ることを考えよう。たとえ段差が車輪の半径より高くても、前の車輪だけなら段差の上へ上げることはできる。しかし、重りを動かさなければ、車が上れるのはここまでだ。車全体が、段差の上へ上がることはできない。しかし、柱を曲げて重りを段差の上まで動かして、車全体の重心を段差の上に移動させれば、どうだろうか。そうすれば、後ろの車輪は床から離れて、車は段差の上へ上ることが出来る。これなら、前後の車輪の間隔を広げることによって、いくらでも高い段差に上ることが可能である。

※いくらなんでも重りをつけて移動させるのは反則だ、と言う人もいるかもしれない。しかし、そんなことはない。B 重心を移動させなければ、どんな方法を使おうと、段差を上ることは不可能なのだ。私たちだって、段差の上に片足を載せただけで、真つすぐに突っ立って立てば、段差を上ることはできない。段差を上るためには、体を曲げて、段差に載せた足よりも先まで、頭を持ってこなければならぬ。そうして、体全体の重心を段差の上まで移動させてから、足を伸ばすことによって、段差を上るのである。だから、重心を移動させるのは反則でも何でもなく、段差を上るために不可欠なことなのだ。このように少し工夫をすれば、車輪でもいろいろなことができる。木に登ることだってできるのだ。さらに言えば、複数の移動手段を進化させた生物は、たくさんいる。だから、車輪が使えないときは別の手段で移動して、車輪を使えるときだけ使う、そんな生物が進化したっておかしくない。

カラスは空を飛ぶ。でも地面を歩くこともできる。カラスは空を飛ぶ

翼も、地面を歩く肢も、両方持っているからだ。昆虫のカブトムシも、空を飛ぶ翅と、地面を歩く肢を、両方持っている。一方エビは、泳ぐことも、海底を歩くこともできる。泳ぐための肢(腹部についている腹肢)と、海底を歩くための肢(胸部についている胸脚)を、両方もっているからだ。

だから、肢と車輪を両方進化させた生物がいたってよさそうなものだ。デコボコした場所は肢で歩き、平坦なところは車輪で疾走する。そんな生物がいたら、繁栄しそうに思える。ローラースケートのように、脚の先に車輪をつけるのも、よいかもしれない。これなら、車輪で越えられないような大きな石は、跨げばよいのだ。それなのに、いくらサバンナを見渡しても、車輪で走っていく生物が1匹もないのはなぜだろう。以上の話をまとめよう。地球上で車輪を使える場所はあまりないけれど、まったくないわけではない。さらに車輪だけでなく肢も同時に進化させれば、もはや何の問題もない。車輪が使えないところでは、肢を使えばよいのだから。どうやら「地面がデコボコだから車輪が進化しなかった」とは言えないようだ。

#### 【更科功『進化論はいかに進化したか』】

注 食性：動物の、食物の種類や食べ方についての習性。

問一 — A・B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の

アからそれぞれ選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア そもそも イ たとえば ウ さらに

エ つまり オ もちろん

問二 — 線①「ヒト」を表すのに、漢字ではなくカタカナが用いら

れている理由として最も適当なものを、次のアから選びなさい。

ア 人間を特別な存在として自然界の他の生物と区別するため。

イ これから述べる話題の中心となる言葉として強調するため。

ウ 人間を生物の中の一つの種類として扱うことを示すため。

エ この言葉をもととの意味とは違<sup>ちが</sup>う意味で用いているため。

問三 — 線②「本当にそうだろうか」とありますが、ここで筆者は

どのようなことに対して疑問を投げかけているのですか。最も適当

なもの、次のアから選びなさい。

ア デコボコの地面では車輪は使い物にならないこと。

イ ヒト以外に車輪を進化させた生物が全く存在しないこと。

ウ 自然界はデコボコだらけで平らなところがないこと。

エ 地面がデコボコだから車輪が生物で進化しなかったこと。

問四 — 線③「車輪のエネルギー効率が良い」とはどういうことで

すか。「エネルギー効率がよい」理由もふくめて五十字程度で説明

しなさい。

問五 — 線④「車輪の欠点」について具体的に説明しているひと続

きの二文を本文中からぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。  
(句読点も一字にふくみます)

問六 — 線⑤「コアラ」とありますが、筆者はコアラの例を挙げる

ことでどのようなことを説明しようとしているのですか。最も適当

なものを、次のアから選びなさい。

ア 生物は、住んでいる環境かんに合わせてさまざまに体の仕組みを変化

させること。

イ どのような生物であっても、地球上のどこかには生息できる環境

があること。

ウ 地球上には、合理的とは思えないような生態の生物がいくらでも

いること。

エ 生息条件が限られていることは、その生物が存在しない理由にな

らないこと。

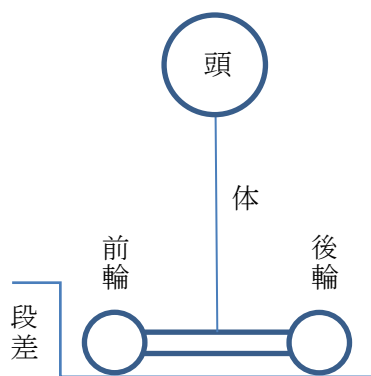
問七 — 線⑥「この車で段差を上ることを考えよう」とありますが、

この車のような体のつくりを持つ左の【図】のような生物がいると

仮定して、この生物が段差を上る過程について、後の条件(1)～(3)を

全て満たすように説明しなさい。

【図】



〈条件〉

- (1) 三つの文に分けて、全体を八十文字以内で書くこと。
- (2) 一文目は「まず」、二文目は「次に」、三文目は「最後に」で書き始めること。
- (3) 「前輪」、「後輪」、「頭」、「体」という語を全て用いること。

(下書き用)


問八 本文には次の一文がぬけています。本文の※より後で、この文が入る直後の文の最初の五字を答えなさい。(句読点も一字にふくみます)

\* しかも、車輪を複数使えば、かなりデコボコでも走れるので、車輪が使える場所は思ったよりも広いかも知れない。

問九 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～オから選びなさい。

- ア 最初の段落で問題提起を行い、中間部分で具体的な根拠を挙げ、最後の段落で問題提起に対する筆者の解答を示している。
- イ 最初の段落で世間の一般論を示し、中間部分で一般論に対する筆者の疑問点を挙げ、最後の段落で一般論を否定している。
- ウ 最初の段落で問題提起を行い、中間部分で問題提起に対する一般的な解答を示し、最後の段落で筆者独自の解答を示している。
- エ 最初の段落で筆者の意見を述べ、中間部分で筆者の意見を裏付ける根拠を挙げ、最後の段落で再び筆者の意見を述べている。
- オ 最初の段落で世間の一般論を示し、中間部分で筆者の意見とその根拠を述べ、最後の段落で読者に問題提起をしている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

札幌に住んでいたぼく(リョウ)は、小学四年生の時に実の母を亡くした。その後写真家の父は沖繩で出会った晴子さんと結婚し、父とぼくは那覇に引越し三人で暮らすことになった。ある日、父はぼくに二人で残波岬に行こうと提案した。風雨の中で岩場に大小の波が打ちつける勇壮な風景を見ながら、父はぼくに母や晴子さんのことを語った。

① 晴子さんに初めて会ったときはさあ……」

父は波に目を戻した。——注1 鯨。

「すごい人だなあって思ったんだよ」

感嘆。——正に、そんな声の色だった。

「知れば知るほど、すごいなああって思った。自分のふるさとを愛してて、お父さんにいい景色を撮らせるために一生懸命になってくれて、写真のことなんか何にも分からないのに、お父さんが何をしてほしいか、どうしたら喜ぶか、一生懸命考えて、助けてくれて……あんな目に遭ったのに、何でこんなに人のために一生懸命になれるんだろうって」

言い終えてから、父は口を滑らせた顔をした。そして、

「……晴子さんも、いろいろ辛いことがあった人なんだ」

ぼくは「そうなんだ」と注2 形式上ではあるが、軽く驚いて見せた。

「晴子さんは、いい人だね。それは分かるよ」

だから、父が晴子さんを好きになっても仕方がない。母が亡くなって寂しかったのなら余計に。それは、もう納得しているつもりだった。

雨が、どさつと降ってきた。

ぼくらは、どちらからともなく、波に背を向けて車のほうへ戻った。

岩場を抜けて、道路に戻った辺りでのことだった。

「リョウ」

父が不意にそう呼びかけた。

「なに？」

ぼくはまったくの無防備。

② 三回忌に帰るの、やめないか」

は!? ——と、注4 怪訝な声を出すことさえできなかった。

一体——一体一体一体、

この人は、

何を言い出したんだ？

「お墓参りに帰ってたら、お前、お母さんのこと忘れないじゃないか」

何で、母のことを忘れなければいけない？

意味が分からない。意味が分からない。意味が分からない。

「お前、いつまでも晴子さんのこと、お母さんって呼ばないじゃないか」

——そういうことか！

確かに、晴子さんのことを、お母さんとはまだ呼べない。

でも、大人になるまで、呼べないとは思わない。

今はまだ、無理なのだ。

それでも、晴子さんはいい人だし、ぼくは心を許しはじめているのに、

——どうしてこのクソ親父は、一々一々、台無しなことをするんだ！

「お母さんのことなんか、もう忘れろよ」

なんか。——父は、決して添えてはいけない言葉に、「なんか」と添えた。

「どうして、そんなこと言うんだよ！」

ぼくは、腹の底から怒鳴った。

声で人を殴れるものなら殴りたい、それくらいの声で、怒鳴った。  
続けて腹の底から迫り上がってきたのは、絶対にそんなことは言っ  
てはいけないと、母にきつく戒められていた言葉だった。

死ねよ、このクソ親父！

ぼくの口からマグマのように声が飛び出す前に、  
横から突然、誰かがぼくらの間に飛び込んできた。

突然現れた誰かは、いきなり父をぶん殴った。

知らない男の人だった。

父は、突然ぶん殴られて、地面に転げた。

「なっ……」

あまりのことに、父は言葉もない。口をぱくぱくさせて、男の人を見  
上げる。

父に少し似ていた。

「何すんだ、いきなりっ！」

父がようやく声を張り上げる。だが、倍ほども大きな声でかき消され  
た。

「謝れ！」

何を？ 誰に？

「こいつに謝れ！」

男の人が激しく指差したのは、ぼくだった。

何が何だか、分からない。

父も分からないようで、地べたに尻餅をついたまま、呆然としている。

男の人は、父の前に両膝を突いて、父の胸倉を両手で掴んだ。

「忘れられるわけないだろう、母親のことを！ まだ、たった二年だぞ！」

ぼくらが母の三回忌の話をしているのを、通りすがりに聞いたのか。  
しかし、何故この人が、こんなにも突然怒るのか。

正義感が強いというより、親切というより、恐いと思った。

間違いかもしれないと思った。

ぼくはただただ竦んで、二人の大人を見守るしかない。

晴子さんがいてくれたら、と思った。

自分ではどうにもできない、めちゃくちゃなパニックが起こったとき、

ぼくはもう晴子さんを頼りにするようになっていたのだと、そのとき初  
めて分かった。

男の人が、父にのしかかるようにして、怒鳴る。

「あんただって、忘れてないんだろ！」

父の顔が、大きく歪んだ。

「自分にだってできないことを、何で息子に押しつける！」

「——だって！」

父が、まるで注5。痲癩を起こした子供ののように、叫んだ。

「仕方ないじゃないか！」

仕方ないって、何が。

「お母さんは、俺を置いて、死んじやったじゃないか！」

そして

泣きじやくった。

まるで火が点いたように、泣きじやくった。

「リョウが覚えてたら、俺も思い出しちゃうじゃないか！」

——そういうことか。

さっきと同じ言葉を、違うテンションで思った。

「リヨウが覚えていたら、お母さんが死んじやったことを、思い出しちゃうじゃないかっ！」

注6 一生、叱られていたかった人が、あまりにも早く死んでしまった。

父は、ずっとパニック状態だったのだ。

母親に突然死なれた幼い子供のように。

父は、晴子さんとの幸せで、母が死んだ悲しみを上書きしようとしていたのだ。

ぼくが晴子さんをお母さんと呼ばない限り、新しい三人家族としての上書きができないのだ。

男の人は、泣きじやくる父の胸倉を掴んだまま、呆然としていた。

父は泣き続ける——泣き続ける——泣き続ける。

男の人が、がくりと頭を垂れた。

そして、父の胸倉を、軽く揺する。

「……それでも、あんたは、こいつのお父さんなんだよ」

B。

——あなたは、リヨウくんのお父さんなのよ。

まるで、母のようなことを、その人は言ったのだ。

「頼むよ。三回忌に連れて帰ってくれ」

父は涙を流しながら、どうしたらいいか分からないように、ぼくを見た。

③ ぼくは、母の臨終の言葉を思い出していた。

お父さんを許してあげてね。お父さんは、ただ、子供だけなのよ。

母は、その遺言で、ぼくのことを言わなかった。

子供が二人いたら、きつと、上の子に下の子のことを頼む。お兄ちゃん、弟を守ってあげてね、とか、そんなふうにな。

母が亡くなる現実に耐えられず、見舞いにさえろくに来られなかった父に、ぼくのことなんか頼めるわけがない。

母は、心配な大きな子供を、ぼくに頼むしかなかったのだ。

「あのさ」

男の人が話しかけたのは、ぼくにだった。

「違うからな」

違うって、何が。

「お母さんは、親父のことを心配してたんじゃない」

正に今、そう思っていたところだったので、ぼくはびっくりした。

④ 親父を許せなかったら、お前が辛くなる。だからだ。お母さんは、最後までお前のことを心配してたんだ」

何で、そんなことが分かるんだろう。

この人は、一体何者なんだ。

「親父が子供で、子供で子供で子供で、お前のことを悪気なくたくさん傷つけるって、お母さんは分かってたんだ」

父は、いつのまにか泣きやんでいた。尻餅を突いたまま、首を落として、地面を見ている。

すると、男の人は、また父のほうを向いた。

「大丈夫だよ。あんたのことだって、心配してたよ。自分がいなくなったら、どうなっちゃうんだろうって、ずっとずっと、心配してたよ。立ち直れないんじゃないか、立ち直れなくて息子を支えてやれないんじゃないかって思ったから、息子にお前が頑張れって遺言を遺したんだ。……だから、」

男の人は、俯いた父の顔を、両手で挟んで上げさせた。

まっすぐ、目を覗き込む。



「あんたが晴子さんと出会って、お母さんはきつと安心してる」

C

今度は、泣き声の上がらない、静かな涙だった。

男の人が、立ち上がった。ぼくらに背を向けて、歩き出す。

ぼくは、父のそばに膝を突いた。

でも、泣いている父に、何と話しかけていいのか分からない。困って、

無言で肩をさすった。

それから、はっと気づいて、男の人を振り返った。

「ありがとう！」

叫んだが、男の人の姿はもうどこにも見えなかった。

(中略)

殴られた頬は、腫れていた。

家に帰ると、晴子さんが「どうしたの!？」とびっくりした。

ぼくらは目を見交わした。腫れた頬の言い訳は作っていなかった。

どうする？ 任せた。オッケー。

「お父さん、はしゃいで岩場で転んじやっただ。子供で困るよね、ま

つたく」

父が

はしゃいだは余計だろ！ 子供も余計だろ！ ——と言っているのは

分かったが、無視。

「もう！」

おかあさんは叱るような口調になった。

「磯でふざけちゃいけませんっていつも言ってるでしょ！」

父はうぐぐと唸っていたが、結局「うん、ごめん」と頷いた。

「冷やさないや」

「いいよ、大したことない」

大したことないことにしたかったんだな、と注7 大人になると分かった。いきなり知らない若造に殴られて、正論をぶたれて、悔しいのかたまりだったのだ。このうえ、手当てがいるような打撃をもらったなんて、認めたくなかったに違いない。

「もつとひどくなるわよ」

晴子さんが玄関を上がった父の後を追ったが、父は「いいよ」と珍しく晴子さんを注8 邪険にして、二階に上がった。

ぼくは部屋で濡れた服を着替えてから、ノートを出した。

鉛筆で、お母さんと書いてみた。それから晴子さんと。

お母さん。晴子さん。お母さん。晴子さん。——やっぱり、お母さんという言葉には、母の顔が浮かんでくる。

ふと気がついて、おかあさんと書いてみた。——おお。

「……いけるかも」

おかあさん。晴子さん。おかあさん。晴子さん。おかあさん。おかあさん。おかあさん。晴子さんが顔を出した。

ドアが軽くノックされて、晴子さんが顔を出した。

「リョウちゃん」

慌ててノートを閉じる。

「なに？」

「お風呂立ててあるから入っちゃいなさい。注9 カツさんは後でいいって」

「分かった」

お風呂に入り、父と交替し、父が上がってから、晩ごはんになる。緊張して、おかずが何だったのか覚えていない。

目につく端から白飯にワンバウンドでかき込んで、茶碗を空にする。さあ行け。それ行けアンパンマン。愛と勇気だ。

⑤ おかあさん、おかわり」

早口で茶碗を突き出す。

晴子さんがE。むっつりビールを飲んでいた父も。

「……大盛り？ 小盛り？」

晴子さんの声は、揺れていた。

「中盛り」

「中盛り一丁、承りました！」

晴子さんはわざとらしくおどけて、台所へ立った。

中盛りをつぐのに、やけに時間がかかっていた。

涙をすすする音が聞こえた。

父は、何も言わなかった。

だが、ごはんが終わって、二階に上がるときに、ぶっきらぼうに言った。た。

「飛行機、前日でいいな」

晴子さんが、「まだ取ってなかったの!？」と咎めるような口調になる。

⑥ 大躍進なんだよ。最初は帰るのよそうって言うって  
たんだ。

「法事が終わったら、すぐ帰るぞ」

「もう少しゆっくりしてきたら？」

父は「仕事がある」とにべもない。

ぼくも本当はもつとゆっくりしたかった。祖母とも久しぶりだし、札幌の友達や幼なじみとも久しぶりだ。

だけど、父にとって祖母の家は針のむしろだろう。帰ってくれるだけ

で、御の字だ。友達とは法事の前日に遊ぶことにしよう。

父が二階に上がってから、晴子さんが言った。

「リョウちゃんだけでも、もつとゆっくりしてきたら？ 航空会社に頼めば、搭乗も到着も係の人が面倒見てくれるし、おばさん、空港まで迎えに行つてあげるから」

おやおや。せっかくぼくがおかあさんと呼んだのに。

「いいよ、おかあさんも忙しいだろ」

「……ごめんね、ありがとう」

そして、

「おかあさん、お土産は六花亭のバターサンドがいいな！」

「お父さんも好物だから、きつと一番大きい箱で買ってくれるよ」

「楽しみにしてるね」

こうしてその日、晴子さんはぼくのおかあさんになった。

(一部内容を省略しました)

【有川浩『アンマーとぼくら』】

注1 子鯨：波が岩場に当たって砕け散る形をたとえた表現。

注2 形式上ではあるが、軽く驚いて見せた

：「ぼく」は以前「晴子さん」の「辛い」過去を本人から直接聞いたことがあった。

注3 三回忌：人が死んだ翌々年の命日、またはその日に供養のために行われる法事のこと。

注4 怪訝：不思議で納得できないさま。

注5 痛癢…ちよつとしたことで激しく怒ること。

注6 一生、叱られていたかった人

…「ぼく」の実際の母のこと。母はよく父の子供っぽい行いを叱っていた。

注7 大人になると…この場面は、三十二歳さいになった大人の「ぼく」

が過去を回想している。

注8 邪険…意地が悪く、思いやりのないさま。

注9 カツさん…「ぼく」の父のこと。

※ 本文には一部不適切と思われる表現がありますが、作品のオリジナリティーを尊重し原文のまま掲載しました。

問一 —— 線①「晴子さん」とありますが、「ぼく」は「晴子さん」や

父との関係についてどう思っていますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 父は晴子さんの人柄がらのよさを強調するけれども、同意できないと思っ

ています。イ 晴子さんは頼りになるので、父とずっと一緒にいてほしいと思っ

ています。ウ 晴子さんは父の言うようにいい人だし、信頼らいできる人だと思っ

ています。エ 母を亡くした父が、晴子さんとすぐに結婚したかったのは当然だと思っ

問二 —— 線②「三回忌に帰るの、やめなにか」とありますが、「父」

はなぜそう言ったと考えられますか。八十字以内で説明しなさい。

(下書き用)


問三 ア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア 父の目から、涙が流れた

イ 父ははっとしたように男の人を見つめ、泣きやんだ

ウ 父は再び、子供のように泣き出した

エ 泣きじゃくっていた父が、驚いたように声を飲んだ

オ 父は、うわーっと声を上げて、泣いた

問四 ——— 線③ 「ぼくは、母の臨終の言葉を思い出し出していた」とありますが、「母の臨終の言葉」を、「ぼく」はどのように捉えていたか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア お母さんは、ぼくのこととはまったく心配していなかった。

イ お母さんは、父のことをあまり心配していなかった。

ウ お母さんは、ぼくと父を同じように心配していた。

エ お母さんは、なによりも父のことを心配していた。

問五 ——— 線④ 「親父を許せなかったら、お前が辛くなる」とありますが、「男の人」は「親父」のどのような点を「許」すべきだと考えていますか。三十文字以内で説明しなさい。

問六  D・ E に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア 目を疑った イ 目を見開いた

ウ 目を奪った エ 目を射た

オ 目を剥いた

問七 ——— 線⑤ 「おかあさん、おかわり」とありますが、この部分の「ぼく」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 亡くなった「お母さん」とは別の「おかあさん」として晴子さんを認めることができたので、夕食の時に思い切って「おかあさん」と呼びかけてみた。

イ 「おかあさん」と書くことで亡くなった「お母さん」の面影から離れることができたので、夕食の時には自信をもって「おかあさん」と呼びかけた。

ウ 亡くなった「お母さん」の思い出をやっと忘れることができたが、照れくさい気持ちもあったので、夕食の時に何気なく「おかあさん」と呼びかけてみた。

エ 「晴子さん」を「おかあさん」と書くことで亡くなった「お母さん」への思いを断ち切ることができ、夕食の時にためらいなく「おかあさん」と呼びかけた。

問八 ——— 線⑥ 「大躍進」とは、どういうことですか。次の文の  に当てはまる説明を、本文中の言葉を用いて十五文字以内で補い、文を完成させなさい。

\*  ことを、父が受け入れたこと。

問九 本文の内容についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 父は、息子への向き合い方を教えてくれた男の人に表面的には反発しながらも、内心では感謝していた。

イ 男の人は父の兄弟として、父とリョウウがお互いに分かりあって幸せな家族を築くことを強く願っている。

ウ 晴子さんは、リョウウから突然「おかあさん」と呼ばれたことを、さまざまな感情とともに受けとめた。

エ ぼくは、札幌で友達と会うことと、父親らしくなった父と祖母が仲直りすることを楽しみにしている。